19世紀前半のフランスにおける女子教育論に見る知育擁護の言説（2）

小　山　美沙子

はじめに

フランスで出版された19世紀前半の女性のための知的啓蒙書の分析を進めるにあたり、その背景を見極める手掛かりのひとつとして、本稿筆者は当時の女子教育論にも注目してきた。拙論「19世紀前半のフランスにおける女子教育論に見る知育擁護の言説（1）」（本学『紀要』第45号，2013年）に続き、本稿では王政復古時代におけるcomtesse de RémusatとMadame Campan、Madame Guizotの女子教育論を取り上げる。

この時期の彼女達の有名な女子教育論も、王政復古以前の世紀初頭同様、主に時代が求める良妻賢母像をイメージしたものである。これらは、現代から見れば、男女の性別役割の固定化を促す装置として働く可能性が問題視されるであろう。しかし、他方、男女の教育格差の是正が困難な時代にあって、時代の制約を受けながらも、推奨される女性の役割遂行のために女子の知育を擁護し、女性の役割の重要性が女子に学びを促す有力な論拠となっている点にも注目したい。

又、王政（但し立憲王政）と旧貴族制度が復活した反動の時代、前世期を想起させるような女性が主催する華やかなサロンの存在や、まださほど遠くない前世紀の女性の時代の記憶が、女子の知育擁護の理念や、その具体的な知育の具体的な中身に関する言及に反映することがあったとしても不思議はないのである。

I. Rémusat

comtesse de Rémusat（1780-1821）は、Napoléon失脚後、混迷を極め激動するフランス社会の中で、時代が要求する女性像と女子教育の在り方を未完の女子教育論*Essai sur l'éducation des femmes*（1824）で方向づけた[(1)]。

彼女はその中で、«L'homme doit être formé pour les institutions de son pays; la femme pour l'homme, tel qu'il est devenu. Etre épouses et mères, voilà notre état et nos dignités[(3)]»と明言している。つまり、女性は、「市民の妻と母（*épouse et mère d'un citoyen*）」という、男性の「市民」同様「気高い肩書き」にのみ運命づけられているのである。だからこそ、この肩書きを得た女性が「鼓舞する権利のある敬意（considération）全て」を世間からかち得るような教育を女性に施す必要があるのだ。そうすれば、「彼女には、もはや嘆くことは何もなくなるだろう[(4)]」。ここには、家庭以外の場で影響力を行使していた前世紀の女性の黄金時代への哀惜を抱き続けている女性達に対して、新しい時代が要求する女性像に最大の価値を付与して見せることで、女性達をその方向へ導こうという意図が窺える。

しかし、妻、母という天与の役割を讃えるばかりでなく、その役割遂行のための女子教育を重視したという点が重要である。そこに知育が含まれることは言うまでもない。「自身の知識のおかげで、共同体［家庭］の利益に関する全ての決定において、彼女［女性］が意見を言う権利を保持できなければいけない[(5)]」のであり、子供の教育者としての役割を担うためには、まず母親を啓蒙する必要があるから、«Pour instruire les enfans, il faut avoir éclairé les mères[(6)] »と著者は言っている。

Rémusatの知育推奨は、男性に劣らぬ女性の知性への信頼に裏付けられたものであった。事実、彼女は、«Comme créature intelligente, la femme n'est pas différente de l'homme. Elle possède sans doute à un moindre degré les mêmes facultés, mais elle les possède; et c'est assez pour qu'elle mérite qu'on les exerce[(7)]»と言っている。だが、「完璧な教育というものは、人の良い夫を当然おじけづかせることになると思われるあの豊かな学識（ce trésor de science）を、

女性に与えないであろう[8]」と言う彼女は、女性の役割に役立つ程度の節度ある知育を考えていた。従って、女性が、「その使命に役立たない研究あるいは知識」に没頭することには否定的であった[9]。女性の知識獲得は、常に「有用な目的」のみを目指すべきだと彼女は主張したのである[10]。もはや前世期のような女性の学問熱を容認する時代ではないことを、女性達に認識させようというのであろう。いかにも時代性が表れていると言えるが、女性の知識をその役割に役立つ範囲に限定するという主張は、勿論前世期にもあった。しかし、有用性こそは、女性の知への接近を容認する有力な論拠にもなりうるのである。

II. Campan

一方、Madame Campan（1752–1822）は、長年女子の寄宿学校で教育に携わり、教育者として「多大な名声[11]」を得ていただけあって、教育方針とその理念を *De l'éducation*（2 vol., 1824）の中で具体的に表明している[12]。

彼女も又、家庭が女性達の「唯一の栄光の舞台」であるとし、娘を「良き妻、良き主婦で家庭の良き母親（bonne épouse, bonne maîtresse de maison et bonne mère de famille）」にすることを目指している[13]。しかし、そのために、針仕事や芸事だけでなく、年齢に応じた段階的な知的形成にも十分配慮することを怠らなかった。彼女は、Fénelonが娘の無知の弊害を述べた «L'ignorance d'une fille est cause qu'elle s'ennuie et qu'elle ne sait à quoi s'occuper innocemment» で始まる一節を *De l'éducation des filles*（1687）から引用し、「この上なく盲目的に快楽の渦に身を投じるのは、最も浅はかで、最も教養がなく、最も退屈している女性であるということがわかるだろう」と述べている[14]。彼女も又、悪徳につながる無知の危険性を強調しないではいられなかったのである。「彼女［娘］の判断力を養成し、その精神を啓蒙すること、それが、彼女に永続的な幸福を保証する」と言うCampanは、娘の知的啓蒙が、未来の「良き妻、良き主婦、良き母」の育成につながるという期待を抱いていたのであった[15]。

彼女の教育プランによれば、まず、7才までの教育（男女共通）では、読み方、書き方、計算といった基本的な能力の養成が始められる。特に計算のレッスンについては、«L'idée des nombres est essentielle au développement de l'intelligence[16] »としており、知性そのものの発達を重視していた。

7才から12才までの学習は、これらの基礎学習がより強化されることになる。毎日、朗読をさせて、散文と韻文の「句読法の規則をよく感じ取らせなければいけない」。詩の暗唱を通して、«le précieux talent de bien dire[17]»を育む必要があるとしている。又、毎朝書き取りを課すが、その際、習った文法の規則が活用でき、且つ歴史や格言などを組み合わせた、内容的にも有益な文章が選ばれる[18]。計算は、「やり繰りに関すること全てを調整するもの」として将来有益であるから、毎日朝のレッスンで四則以外の複雑な計算練習も行なわねばならない[19]。更に、聖史が「全ての学習の筆頭にあるべき」学習として推奨されている。これは、「世界史を理解させる」と共に、「信仰に関する項目」を浸透させることに役立つものである[20]。勿論、初聖体拝礼のために聖書の勉強もなされねばならない。加えて、地理の基礎は«favoriser la justesse des idées[21]»のために必要で、地球儀を辿りながら、まず、聖史に関連する地理を学ぶ。更に地球のおおまかな区分と世界の区域を理解した後で、地図を辿って細部を学ぶことになる。特にヨーロッパの地理は、「最も念入りに教えられねばならない」。中でも、フランスの地理は「歴史の理解と現時点での有用性のために」、地方と県毎に教えられる必要がある。「良い地理学辞典」に従って、フランスの陸路を辿り、それぞれの都市の地形、輩出した人物、産物、産業、商業、建築物などを問題にすることになる[22]。読書については、「有益な読書によって精神に滋養を与えねばならない」として、教訓的な読み物、歴史、地理、手紙の書き方、博物学、植物学、物理、天文学のジャンルの普及書が挙げられている[23]。のみならず、「子供達が英語に精通したら、多くの有益な読書をさせることができる」として、アイルランドの作家Maria EDGEWORTH（1770–1849）の子供向けの有益な物語の読書も推奨している。特に、Campanは、

作者が対話を用いている箇所を暗唱させ、復唱させることは、「あらゆる英語のレッスンの中で最良」であり、そこに「魅力的な物語と結びついた最も純粋な倫理」が見出だせるとして、語学の学習と徳育の面での有益性を指摘している[24]。

これ以降の読書については、Campanは、まだ判断力が形成されていない時期（12才から16才位）における小説本の読書を戒めている[25]。しかし、18才になって自分のしかるべき信条（principes）が固まってきたら、「重大な過ち」や「大きな不幸」を若い娘達に知らせるために、小説の読書も有益であるとして、例えば、Richardsonの*Clarisse*などを推奨している。演劇の鑑賞については、「我が国の演劇文学の知識を得て、フランス演劇の傑作のいくつかの上演を見たいと思うようになる年齢まで」若い娘達に観劇は禁じている。娘達には、「愛国主義」や、「母性愛」など「最も偉大な思想、そして最も高邁な感情」を吹き込むような作品を選ばねばならない[26]。喜劇も、«un grand cours de morale mise en action»を提供するようなものが選ばれねばならない[27]。あくまでも、徳育上の利点が重要なのであった。

こうして見ると、創設者Napoléonの意向に反して知育も重視する教育を目指したMaison d'éducation de la Légion d'honneurの初代校長らしく、comtesse de Genlisの*Adèle et Théodore*（1782）をやや想起させるほど案外多用で真面目な教育内容が考えられているのがわかる。comtesse de Genlisの教育論は家庭での教育が前提になっていたが、Campanも、«Bien dirigée dans toutes les parties de son éducation, une fille peut joindre à des talens agréables la pratique des devoirs d'une maîtresse de maison»としており、こうした教育をしっかり受け、才芸もこなし主婦としての義務も果たせる理想の娘像«une fille parfaitement élevée[28] »は、家庭で育成することが可能であるとした。彼女は、その実例を挙げて、「母国語と同じ位上手く、英語とドイツ語で自分の考えを表明し、幅広く、しっかりした教養を構成するもの全てを知っており」、楽譜を見ただけでピアノが弾け、万一の時は、仕事にできるほどの写生画の腕前を持ち、しかも、「女性のあらゆる針仕事」に長け、家事を

こなし、慈善活動も行なう、控え目で、信仰心の篤い18才のある娘を本書で紹介している[29]。

ところで、19世紀は、母親に家庭での子供の教育者としての役割を求める傾向が強まる時代である。Campanも、女子教育の担い手として、まず母親を考えていた。それは、«Il n'y a point de pension, quelque bien tenue qu'elle soit; il n'y a pas de grand établissement national, quelque sagement organisé qu'il puisse être; il n'y a point de couvent, quelle que soit sa pieuse règle, qui puissent[sic] donner une éducation comparable à celle qu'une fille reçoit de sa mère, quand elle est instruite et qu'elle trouve sa plus douce occupation et sa vraie gloire dans l'éducation de ses filles[30] »という言葉からも明らかだ。

勿論、母親は、娘の教育ばかりでなく、幼年期の息子の教育（本書では7才になるまで）を担うことも期待されている。この時期、«une mère instruite et sage»に委ねられていた男性には、「特別な優雅さ、理性により耳を傾ける傾向、常に育ちの良い男性の特徴である女性への尊重、敬意が見られる」としている[31]。

こうして、«mères gouvernantes[32] »としての母親自身の教育の必要性の論拠が生じるのである。子供の教育に携わる母親は、«fruit des longs et utiles travaux de femmes distinguées par leurs talens et par l'étude qu'elles ont faite du jeune âge»を糧にしなければならない。«Elles[Les jeunes mères] doivent profiter des savantes recherches ou des spirituelles observations de comtesse de Genlis, ou bien emprunter à madame d'Epinay son tour d'esprit, facile et gracieux»と言うCampanは、当時も再版されていたあの*Les Conversations d'Emilie*（1775）と*Adèle et Théodore*（1782）を念頭に置いているのである[33]。

とはいえ、現実に無能な母親は存在している。「田舎の最も人に知られていない修道院、最もぱっとしない寄宿学校でも、無知で放埒な母親（mère ignorante et dissipée）が自宅で施す教育よりは望ましい[34]」とするCampanは、自身の経験を踏まえ、女子の寄宿学校においても、しかるべき教育ができることを示した。特に、彼女が初代校長を務めた有名なEcouenの女学

校において、知育も又熱心に行なわれている事実が実例として紹介されている。彼女によると、«Leur instruction[des élèves] est sur la langue française, sur l'histoire, sur la géographie, est des plus étendues; leur écriture est très-bonne, et le plus grand nombre possède ce talent jusqu'à pouvoir l'enseigner[35] »であるという。本書では、教育全般における「寄宿学校の良き女教師」の重要性が示唆され、実際的な教育方法も含め、その仕事も説明されているが[36]、これは、公教育の場で母親による教育を肩代わりする女教師養成の必要性を認識させるものである。

III. Guizot

同じ頃Pauline GUIZOT（1773-1827）[37] も、「彼女の真の記念碑[38]」と後にSainte- Beuveに評される*L'Education domestique, ou Lettres de famille sur l'éducation*（2 vol., 1826）[39] において、家庭での女子教育の理念を示した。これは、主にSophieとLouiseという２人の娘を育てているMme d'Attillyによる書簡の体裁で展開されているものである[40]。彼女が理想とした未来の家庭婦人像は、精神的に自立しているしっかりした考え方のできる女性であるが、その教育は、節度と中庸を得たものでなければならなかった。

女性は本来、男性に隷属するよう運命づけられているわけではないと考える彼女は、家庭での細々とした点での男女の領分の違いを認めながらも、「通常、世帯の大きな利害に関わる事は、各人の可なり対等な、あるいは、少なくとも精神的な強弱に見合った影響力によって決定される」としている[41]。夫の命令に盲従するのではなく、世帯の利益にかなった適切な判断を、妻自身もできなければいけないのである。

女性の能力は、理に適う範囲で大いに発揮されるべきである。Mme d'Attillyは、«[...] nulle position spéciale, pourvu qu'elle soit conforme à la morale et à l'ordre naturel des choses, ne peut exiger l'annihilation d'aucune de nos facultés. Nous sommes appelées à user de tout ce que nous sommes dans tout ce que nous faisons, et la situation qui nous défendrait l'usage constant de notre raison, de notre

fermeté, l'attachement à certains principes, serait certainement fausse et répréhensible[42] » と言っている。ここではまず、家庭婦人に必要な理性的能力のことが問題にされているのがわかる。

それ以外の能力についても、«Je crois que, sans rien comprimer, il est bon de garder dans l'éducation des femmes une certaine modération[43]» と彼女が言うように、能力を抑圧はしないが、全て節度ある範囲での育成が望まれるのである。男性の場合は、ひとつの能力を高めることが栄光に繋がるが、女性の場合は、この能力が女性を「幸福の道から逸らす危険」を引き起こすからである。勿論、女性には相応しくないと考えられる「精神的あるいは知的能力」については、これを開花させる努力をすべきでない。事実、Mme d'Attilly は、「たとえソフィーの中に政治の才能、あるいは演壇での雄弁の素養の芽を発見するとしても、私は、きっとそれらを開花させようとはしないだろうし、私が彼女に吹き込める高尚な感情の中から、栄光への愛を選ぶことはないだろう」と言っている[44]。尤も、偉大な才能に恵まれた女性の場合は、この能力を阻むことはできない。宿命的な「偉大なる才能」を持つ者からこれを奪い取ることは不可能であるから、「多分、何ものもサフォーが詩を作り、スタール夫人が立派な散文を書くことを阻止することはできなかったであろう」。しかし、こうした「才能の抗しがたい力」は、女性においては稀であるから、«les facultés d'une femme même distinguée peuvent être, je crois, maintenues sans peine dans un prudent équilibre, dont l'effet ne sera point de la réduire à une médiocrité que ne commanderait pas la nature, mais d'empêcher que les supériorités naturelles dont elle peut se trouver douée ne prennent une trop grande place dans sa vie» と、Mme d'Attilly は、節度ある才能の開花の可能性を示唆している[45]。とは言え、女性の運命に相応しい家政の能力の育成が中心になるような教育にも否定的である。家政が若い娘達の教育の中心になることは、知的形成と人格形成にマイナスであるとして、«ce serait, je crois, aider puissamment à la médiocrité de l'esprit et du caractère, que de faire [...] des soins économiques du ménage le point capital de l'éducation des jeunes filles[46] »

とさえ言っているのである。

ところで、Mme d'Attillyは、娘のSophieとLouiseにとって「知性を研くことは、限りなく都合のいいこと」だろうが、「勉強への情熱を殊更掻き立てようとは思わない[47]」としていた。具体的な学習においても、やはり節度ある知育を考えているのである。社交界で活動するのに必要な「十分な知育[48]」として示されている知育の内容は、「その場にふさわしい作法」と「誰もが知っていることを知らないということないようにする必要性」が要求するものであったが、これは、「決して最も普通の少女の理解力と努力」の範囲を超えるものではないと言う[49]。又、「サロンでおしゃべりがされている中で、より興味深い対話に」話題を提供し、「賛同」や「評価」を与え、「自身よりも優れた精神の持ち主」の話を「傾聴する術を心得ている」ような«femme distinguée»を養成するには、「女性の家庭教師」に「非常に幅広い知識」を求める必要はなく、能力ある母親で十分対応できるとしている[50]。

その内容は、次の通りである。つまり、«une connaissance nette et précise, mais pas très approfondie, de l'histoire et de la géographie»、これに「当然」、「天球儀」の知識が含まれねばならない。そして、「普段、自分の目に映る現象や日常使用している物の性質について無知なままでいなくてすむのに十分な」程度の「博物学の基礎知識をいくらか」身に付け、母国語を「よく学ぶ最良の手段」でもある「ひとつの外国語の学習」が必要である。更に、「我が国の文学全般の大凡の知識」を持ち、フランスの作家達の作品も読まねばならない。「正確に書き、注意深く読み、自分が読んだものを理解する習慣」をつけ、「詩句を覚えて」記憶力を鍛える必要もある。この他、「本人の素質が許す限り」、芸事（音楽とデッサン）もやらせる。これらが、若い娘に対して「少なくとも10-12年間」施され、無理なく配置できる一日の学習内容であり、「定期的で継続的なレッスン」を施す学習であると言う[51]。

SophieとLouiseに対するこれ以上の知育については、「彼女達の好みと

素質次第」であるとしており、前向きな姿勢である。«Il n'est pas permis de refuser à un être raisonnable le développement dont il est susceptible; il pourrait être dangereux de le négliger, et de laisser s'égarer des forces qu'on aurait dû diriger» と Mme d'Attilly は考えており、娘達が天与の «facultés distinguées» を持ち合わせているのであれば、これを正しく導き育んで、余力を健全に発散させる必要があると感じていた(52)。彼女によると、女性の能力が男性ほど広がりを持たないとしても、女性の義務の行使にはそれほど能力の活用を必要としないため、男性同様「有り余る活力」を感じるのだと言う。しかし、男性と異なり活動の場が限られている女性には、この余力を使えず、「危険あるいは嘆かわしい怠惰」に身を委ねたままになるという恐れがある。こうした心配に対して、夫人は次のように言う。

«Il n'est aucune de nous, pour peu qu'elle ait pris l'habitude de cultiver et d'excercer son esprit, qui ne se soit sentie souvent distraite de ses rêveries par les réflexions qu'elles amenaient naturellement, et chez qui le souvenir d'un fait intéressant, une observation digne de l'occuper, n'ait quelquefois calmé les tourmens, apaisé les bouillons de l'imagination, et fait prendre aux idées un cours plus égal et plus raisonnable(53).»

従って、とりわけ、溢れるような精神的活力を持ったSophieの場合は、その知性を鍛練し、育むことで、精神を健全な方向に導く必要があった。すなわち、無為に陥らないよう、彼女の頭を「材料（matériaux）」で一杯にしてやり、彼女は、これを「自身の知性の本性に最も相応しい順序で整理する」ことになる。その際、彼女に、「物事の正確な観念を持つことに慣れさせ、その実際の価値について思い違いをしたり、特に自分が好んで取り組む事柄の細部に衒学趣味を形成するような重要性を与えることができないように(54)」する必要があるとしている。ここでは、危険な無為の防止のための知識の推奨のみならず、整理された正しい知識の獲得と、理性的な

思考を促す意図が込められていることにも注目したい。加えて、衒学趣味への警戒は、とりわけMme d'Attillyが繰り返し表明したことであった。

しかし、一方で、«Elle[une femme] ne sera pas pédante en sachant le grec, si elle sait aussi qu'une femme peut très bien apprendre le grec pour son plaisir, mais qu'il n'importe à personne qu'elle sache ou ne sache pas le grec»と言う彼女は、自分に「関心のある事を誇大視」したり、自分の「知識を他人に押しつける」ことをせず、単に自分の楽しみのためだけに学問をするのであれば、女性がこうした悪癖を回避できると考えていた(55)。これは、女性の高度な学問への接近を許容していることになる。尤も、博学な女性になることが許されるのは、あくまでも例外的なケースに限られねばならなかった。事実Mme d'Attillyは、«excépté dans certains cas particuliers, une femme doit être occupée et non savante; les goûts de l'esprit doivent employer ses forces et non les absorber(56) »と言っている。

勿論、博学な女性（savante）を目指す必要はないにしても、生半可な知識でなく、しっかりした知識の習得の重要性が、本書で強調されていることも指摘しておかねばならない。M. d'Attillyは、妻に対して、「私は、貴女同様、彼女達［私の娘達］をsavantesにする意図を持たない」と言う一方で、Sophieには、「十分な素質が見られたので、これを入念に育む決心をした(57)」と言っていた。娘の知育に「もう少し多くの方法」を持ち込むことを考える彼は、まず、8-9才までは、子供の関心を引くに値する「確かな見解や知識」で子供の頭を働かせ、「関心を持つに値すること」に関心を向ける習慣をつけ、記憶力と注意力がしっかりしてきたら、学習の仕方を教え、子供をサポートして勉学の困難を克服させる必要があるとしている(58)。そして、何よりも、学習は継続させることが肝要であるとして、Sophieが持続的に学習する習慣を身に付けるよう配慮することを妻に命じている。というのも、虚栄心（vanité）は、「長期間の学習で獲得した知識」に由来するものではない。むしろ、「俄仕込みの些細な知識」を持つ者が自分を物知りだと惚れることが原因である。従って、«Il faut donc garantir

avec soin les femmes surtout de ce demi-savoir auquel les dispose la nature de leur esprit, plus prompt qu'exact, et plus pénétrant que conséquent» と、特に女性にありがちな生半可な知識を予防する必要性を主張している(59)。「女性の知識は、大抵の場合、会話に適用される」が、女性は、「よく知らなければ知らないほど、あの金ぴかもの（oripeau）で身を飾ることに熱心であろう。なぜなら、彼女はこれが［人を］幻惑するに相応しいと信じているからだ。しかし、幻惑する以外の利益をそこから引き出すことはできないであろう」と、社交界で浅薄な知識をひけらかす女性の愚かさを、M. d'Attilly は、皮肉な調子で批判している。そして、彼は、「底の浅い（superficiel）ものは見せびらかしにしか役立たない」と、浅薄な知識の無益さを強調すると共に、«Le vrai plaisir du savoir, c'est l'étude. Nous aimons, dans les connaissances acquises, ce qu'elles nous promettent de connaissances nouvelles(60)» と、本来知識は、人前で誇示するものではなく、自分のためであり、知ることに楽しみを見出すべきものであることを示唆するのであった。

この他、Mme d'Attilly も又、読書の重要性に言及している。家事仕事に精を出している田舎の少女 Emmeline について、自分が知らない世界を教えてくれるような「読書で、自身の頭の働きを活発にし、広げることが望ましい」としている。Mme d'Attilly は、思考の範囲を実際的な生活の枠外に広げ、日常性を超える対象をも客観的に判断し考察する能力を重視していた(61)。これは、時代を問わず本来教育が重視すべきものである。しかし、立派な知育に手が届かなくとも、読書がその代わりを果たしてくれるはずである。«Sans arriver à une grande instruction, votre Emmeline peut acquérir par la lecture des connaissanes et des habitudes d'esprit capables d'augmenter inifiniment la liberté de son jugement, et en même temps l'élévation de son caractère. Le goût de la lecture la préservera aussi du vide et de la langueur de l'âme, si dangereux dans la jeunesse(62) » と言っている。読書による知的・精神的陶冶と共に徳育上の効用をも彼女は認識していた。

勿論、彼女は、人生で困難な時、「我々が頼れる、罪のない容易な関心

事を見出だせるのは貴重な利点」であるとして、«En rendant le mouvement à notre esprit, elle[la lecture] allège le poids de la vie[63]»と、書物に心の慰めとなるような滋養をも見出だしている。

尤も、これらの効用が得られるのは、良書による「真面目な読書」に限られる。少なくとも、「読書の趣味がほとんど形成されていない」うちに小説本で読書を始めれば、「その後、いかなる真面目な本にも楽しみを見出すことは不可能であろう」[64]。こうして、Mme d'Attillyは、Emmelineのために、例えば、「博物学の書、そして特に植物学の書」を奨めた。これらは、少女が面白いと感じ、「自身の日常の仕事に見出す楽しみを増やす」だけでなく、「科学は、事物の中に生命と魂を吹き込む、なぜなら、科学は、それまで視線だけ集めていたものについて、考察することを教えるから[65]」であった。

残念ながら、本書でMme d'Attillyによる具体的な読書プランは示されていないが、少なくとも、彼女は、Emmelineの中に«goût des occupations de l'esprit»を掻き立てるような種類の読書を考えていることを表明し、そうした読書は、Emmelineが将来どのような境遇に置かれようと、「その人生に品格を与え、苦痛を和らげ、幸福の主たる要素のひとつとなるだろう[66]」と、読書の精神的効用を述べている。但し、Mme d'Attillyは、こうした真面目な読書への趣味をEmmelineに吹き込むことは困難であろうから、母親が「自身の考察を彼女［娘］に伝え、彼女の考察を促し」、書かれている事柄を理解させるような対話もしながら一緒に読書をすることを想定している[67]。

男子のコレージュと異なり、一般に、「デッサン、音楽、針仕事」が「女子寄宿学校生の時間の大部分を奪っている[68]」などといった状況である公教育への不信感を強く持っているMme d'Attillyは、まず、母親による女子教育に期待をかけていた[69]。これは、勿論、家庭教育のより良い実践の可能性を信じて本書を構想したに違いないMadame Guizotの基本的な立場でもあった。女子の公教育の整備が遅れている状況を考慮すれば、母親に期待

をかけるというのは、当時としてはより現実的に思われる選択であったと考えられる。とはいえ、母親達は、必ずしも期待に応えられる状況であったとは言えない。しかし、それだからこそ、娘の教育者としての役割遂行のために、女性の知への接近を当然だとする論拠が成り立つのである。

むすび

革命の成果の継承と反動という混迷の時代、女子の公教育の整備が遅れる中、時代が求める女性の役割の重要性を認識し、その教育の在り方、それも知育について積極的な言説を展開したのは、王政復古時代以前同様、やはり前世紀の時代精神の洗礼を受けた女性知識人達であった。その中には、comtesse Le Groing La Maisonneuveのように女学校の運営に携わったMadame Campanのような教育家がいたことも重要である。そして、彼女達は、時代の変化に呼応し、既に前世紀の女子教育論でも注目されていた女性の家庭での役割重視の立場と共に、女性の知的能力への信頼に基づいた役割遂行のための知育重視という姿勢をも継承したのだということを忘れてはならない。

のみならずMadame CampanやMadame Guizotのように、先の時代に提唱されていた多様な知育の分野を、科学も含めある程度復活させ、読書の重要性を改めて主張している点も、旧制度時代の名残を残すサロンを復活させた時代に相応しいと言える。また、妻、主婦、そしてとりわけ高まる子供の教育者としての母親の役割は勿論、交際社会での役割遂行も又、女性達に学びを促す要因であり続けることになるのである。とりわけMadame Guizotの書にあっては、前世期にも見られた性別を超えた学びの意義が示されている点にも注目したい。

とかく、当時の強まる女性性への固執と良妻賢母主義の理念ゆえに、19世紀前半の女子と知育の関係をひたすらネガティブなイメージで彩りがちであるが、時代の制約も考慮しながら、女性達に知への接近を促す様々な言説を改めて検討することで、これまで見落とされがちであった新たな相

貌が浮かび上がってくるのである。

註

（1） comtesse de Rémusat（Claire-Elisabeth-Jeanne Gravier de Vergennes）は、Napoléonの宮廷に出仕しJoséphineの女官となったが、皇后が離縁された折宮廷を去り、小説の執筆など文筆活動に打ち込んだ。彼女の教育論と共に有名な回想録*Mémoires*（1802-1814）も死後に出版された。又、帝政時代と王政復古時代、彼女のサロンは「非常に人気があった」という。（*Dictionnaire des femmes célèbres*, Robert Laffont, 1992, p. 724参照。）1794年、断頭台で処刑された父亡き後、彼女の母親は、«beaucoup d'intelligence et de haute raison»でもって、彼女を含むふたりの娘の教育を行なった。母親は、当時、«un cercle intime d'amis de choix, philosophes et publicistes, qui agitent dans son salon les questions les plus sérieuses et discutaient avec autant de verve et d'esprit que de bonne grâce et de parfaite courtoisie»を開いており、娘時代の彼女は、こうした18世紀的な時代精神と、サロンの伝統の雰囲気に包まれて育ったのであった。（BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie*, Hachette, 1911, p. 1750参照。）

（2） 本書は著者が1821年に亡くなったため、未完のまま息子のCharles de RÉMUSATによって1824年に出版された。1825年には第3版が出るほど好評であった。出版申告部数は、初版が、最初1,500部、更に増刷（1824年）で900部、第2版（1824年）と第3版が、それぞれ1,500部である。出版報（1842年3月19日）には、ParisのCharpentierから本書の新版（in-12）の告知があり、更に再版がなされた模様である。1903年にも、Octave GRÉARDによって再版がなされた。

（3） RÉMUSAT, *Essai sur l'éducation des femmes*, 3e éd., Ladvocat, 1825, p. 44.

（4） *Ibid.*, p. 106参照。

（5） *Ibid.*, p. 111参照。

（6） *Ibid.*, p. 221.

（7） *Ibid.*, p. 128. Rémusatは、女性の«raison»にも信頼を置いており、«La femme est raisonnable, puisqu'elle a la notion du vrai et du faux»（*Ibid.*）と言っている。しかも、女性は本来«libre»な存在であるとしている。«Pourquoi donc laisserait-on sa raison sans aliment, sa conscience sans lumière, sa liberté sans règle?»と言う彼女は、これまで女性のために施されてきた、«vice des systèmes d'éducations»（*Ibid.*）を批判している。

（8） *Ibid.*, p. 166参照。

（9） *Ibid.*, p. 167参照。

（10）*Ibid.*, p. 231参照。Rémusatは、なおざりにされた女子教育を嘆き、女性の役割に相応しい知育を推奨していたFénelonの女子教育論を本書で讃え、引用もしている。具体的な学習プランまでは提示しなかったが、その趣味があれば節度ある範囲で雄弁や詩の本を読むことも容認していたFénelonよりも、女性の役割へのこだわりが徹底しているのは、やはり時代を感じさせる。

（11）BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie*, 1911, p. 206参照。

（12）本書は、*Gazette de France*などの新聞の文学の分野を担当したJ.-F. Barrière（1786–?）が序文を付し、著者による*Conseils aux jeune filles*や、教育的な演劇作品を付け加えて、著者の死後出版したものである。問題の教育論は、第1巻の大部分を占めている。本書は、1824年に2巻本（in-8°）で、更に3巻本（in-12）で出た。1826年に第3版が出る。又、1828年と1832年にも再版がなされた。本書の内容案内の趣意書（prospectus）の出版申告部数は、1824年、計2回の6,000部に及ぶ。又、1826年と1828年の出版申告部数は、それぞれ3,000部であった。

«AVANT-PROPOS DE L'AUTEUR»の冒頭で、Campanは、«Plus de vingt années de ma vie, uniquement employées à l'enseignement de la jeunesse, m'ont fait observer la diversité d'un grand nombre de caractères, et juger les moyens qui réussissent le plus généralement pour bien élever les enfans»（*De l'éducation*, tome 1, Baudouin Frères, 1824, p. 1）と言っており、Thermidorの反動後、私立の女子の寄宿学校を開いて成功し、帝政時代は、Napoléonに請われてMaison d'éducation de la Légion d'honneurの校長を務めた（1807年から1814年まで）経験が、本書に活かされたのであった。彼女は、これを「今では母親となっている」自身の「昔の生徒達」のために書いたとしている。（*Ibid.*, p. 295参照。）

本書は、7才までの男児と女児の教育（第1部）、7才から12才まで（第2部）と12才から18才まで（第3部）の娘の教育、最後に、寄宿学校での女子教育（第4部）というテーマで構成されている。実際的な教育方法にも適宜言及しながら、段階的に女子教育を論じるやり方は、comtesse de Genlisの*Adèle et Théodore*同様、教育のプロの書であることを感じさせる。

（13）CAMPAN, *Op. cit.*, p. 4, p. 222参照。

（14）*Ibid.*, pp. 148-150、及びFÉNELON, *De l'éducation des filles* in *Œuvres*, I, Gallimard, 1983, pp. 93-94参照。

（15）CAMPAN, *Op. cit.*, p. 222参照。

（16）*Ibid.*, p. 128.
（17）*Ibid.*, p. 167参照。
（18）*Ibid.*, pp. 168-169参照。
（19）*Ibid.*, pp. 169-170参照。
（20）*Ibid.*, p. 157, p. 164参照。
（21）*Ibid.*, p. 164.
（22）*Ibid.*, pp. 164-166参照。
（23）*Ibid.*, pp. 172-173参照。その中にはcomtesse de Genlisの*Annales de la vertu*（1781）なども含まれている。又、Madame de Jonchère（生没年不明）の*Les Enfans du vieux château*の叢書（36 vol.）は、«un grand nombre de fort bons extraits d'histoire et de voyage, mis à la portée des enfans; beaucoup de notions fort utiles sur la botanique, la physique, l'astronomie»（*Ibid.*, p. 173）ということで娘の教育に役立つとされているが、中身の詳細については目下の所未確認である。
（24）*Ibid.*, p. 173参照。
（25）*Ibid.*, p. 208参照。
（26）*Ibid.*, p. 215参照。具体的には、*Horace*（1640）や*Esther*（1689）、*Athalie*（1691）、*Mérope*（1743）などの作品を指す。
（27）*Ibid.*, p. 216参照。具体的には、*Le Misanthrope*（1666）、La Harpeの*Mélanie*（1770）などが挙げられている。
（28）*Ibid.*, p. 146.
（29）*Ibid.*, pp. 146-148参照。
（30）*Ibid.*, p. 138.家庭教師の助けを借りることも出来るが、そうした場合でも、母親には娘の教育を監督する能力が求められる。（*Ibid.*, pp. 140-141参照。）
（31）*Ibid.*, p. 44参照。Campanは、更に、母親の手を離れてからも息子が生涯母親を«guide»と見なす可能性を示唆している。（*Ibid.*参照。）
（32）*Ibid.*, p. 144.
（33）*Ibid.*, pp. 122-123参照。Campanは、Madame Leprince de Beaumontによるロングセラーの総合学習書*Magasin des enfans*（1758）を子供と共に活用することの重要性も示唆している。
（34）*Ibid.*, p. 138参照。
（35）*Ibid.*, p. 292.
（36）*Ibid.*, pp. 236-250, pp. 274-289参照。
（37）彼女は、死後出版となった*Nouveaux contes, ouvrage à l'usage de la jeunesse*

（1833）など、世紀末に至るまで人気を博した多数の子供用の教育図書の著者であった。母方は貴族の家系で、父方の曾祖父は徴税請負人であった。Parisの総徴税官であった裕福な父親の家には、Condorcetなどが常連として集まり、彼女は、«au sein des idées et des habitués du monde distingué»（«Mme Guizot» par Sainte-Beuve in *Biographie des femmes auteurs contemporaines françaises*, Armand-Aubrée, [1836], p. 265.）で育まれた。父親の死後、没落し、家族を養うためにその文学的才能を利用したのだという。小説や文学批評も執筆している。英語に通じ、夫François GUIZOT（1787–1874）のイギリス史とイギリス文学の研究の手助けをした。（*Dictionnaire de biographie française*, tome 17, 1989, Letouzey Ané, pp. 357-358参照。）

（38）«son véritable monument»（«Mme Guizot» par Sainte-Beuve in *Op. cit.*, p. 267.）

（39）2巻本の本書は、同じく、子供の親達の間で交わされる手紙で構成される書簡体小説風で、女子と男子の教育を扱った*Adèle et Théodore*を想起させるものである。尤も彼女自身は、「教育についての小説も教育方式も」提供する意図はなかったとし、«Je n'ai prétendu que rassembler, en un certain nombre d'essais, quelques unes des idées que m'a fait naître le spectacle de plusieurs éducations successivement accomplies autour de moi, idées que depuis dix ans ont fort étendues mon expérience personnelle et le cher intérêt qui en fait l'objet particulier de mon attention»（GUIZOT, *Education domestique*, tome 1, 1826, A. Leroux et Constant-Chantpie, pp. v-vj参照。）としている。こうした経験と観察、考察の所産の書の著者であるMadame Guizotについて、Sainte-Beuveは、「厳密な意味でのモラリストというより、優れた教育論の著者としてこれまで知られ、格付けされてきた」（«Mme Guizot» par Sainte-Beuve in *Op. cit.*, p. 264参照。）としており、本書は、当時高く評価されていたものと思われる。のみならず、その後も支持され続けた。実際、1828年に第2版、1841年に第3版、1852年に第4版、1860年に第5版、1881年に第6版が出ている。

Sainte-Beuveは更に、«Mme Guizot est fermement du siècle, de la philosophie, de l'expérience qui examine»で、「教育の中にいかなる神秘的・非合理的な要因を介入させず」、«rationnaliste»でRousseauと異なり«pratique»であると的確に評している。（*Ibid.*, p. 293参照。）

（40）最初、Sophieは7才で、Louiseは5才という設定になっている。書簡は、1816年から1825年にかけてという設定になっているが、Madame Guizotは、序文で、「例えば、1819年とか1820年という年号で、1826年の社会と人の状況に属する考察や事実」が書簡では出て来るとして、「時間の順序と考えの順序を両立させる必要

性」から、そうした日付と内容の不整合を敢えて行なったとしている。（GUIZOT, *Op. cit.*, p. viij 参照。）

（41）*Ibid.*, p. 385 参照。

（42）*Ibid.*, pp. 390-391.

（43）*Ibid.*, p. 393.

（44）*Ibid.* 参照。

（45）*Ibid.* 参照。

（46）*Ibid.*, tome 2, p. 7. Mme d'Attilly は、庶民の幼い子が、家の仕事を真面目にやってこれに慣れているのを目にするが、幼少の頃からこのように特定の方向性を与えられてしまうと、後になって知的な勉強に専心させようとしても困難であろうと推測している。又、実際的な結果がすぐに出る家事仕事を手伝う Emmeline という少女について、考えが狭くなり、想像力が «un cercle étroit» を出なくなるとしている。尤も、無為は良くないから、若い娘達が「何もしないよりは」、家政を「やる方が確かによい」とも彼女は考えていた。（*Ibid.*, pp. 6-7 参照。）

（47）*Ibid.*, tome 1, p. 395 参照。

（48）*Ibid.*, tome 2, pp. 438-439 参照。

（49）*Ibid.*, p. 47 参照。

（50）*Ibid.*, pp. 30-31 参照。尚、Mme d'Attilly は、多くの若い娘達が Paris の寄宿学校で家庭でよりも良い教育を受けていることを確信しているとしながらも、女子の公教育は将来の実生活に対応できていないと考えていた。（*Ibid.*, pp. 19-20 参照。）

尤も、本稿の註（46）に記したように、実際には家事仕事中心の偏った教育に陥るなど、問題が生じないわけではない。そこに、Mme d'Attilly などによる助言の手紙を通して、本書で Mme Guizot があるべき家庭教育の道を説く意味があるのである。

（51）*Ibid.*, pp. 48-49 参照。Mme d'Attilly は、針仕事など、女性が必要に応じて自然に覚えるような、«connaissances usuelles» や、特に努力をしなくても自然に身に付くような知識は学習の対象にしないとしている。（*Ibid.*, p. 48 参照。）

（52）*Ibid.* 参照。

（53）*Ibid.*, p. 51. 既に Pluche は、*Le Spectacle de la nature*（1732-1750）の第5巻の第5の対話、«Suite de l'Education, contenant la lettre d'un père de famille sur la première culture de l'esprit, soit dans l'éducation des Filles, soit dans celle des Garçons» で女子教育論を展開している。ここでは、まず宗教教育が重視され、教会史を学び、福音書や教理問答集といった宗教書を読むことが奨められている。次いで、読み書き、

計算という実生活に必要な学習の重要性が説かれている。しかし、彼も又、能力のある娘の場合は、«facilité naturelle» を満足させる糧がないと、危険な «pervers» にのめり込む可能性があるということで、それ以上の教養（聖史、世俗の歴史、神話、博物学など）を身に付けさせることに好意的であった。のみならず、«une fille d'un excellant esprit» は、人を楽しませる会話や、適切な助言と説得などで、«le lien de toute la famille» となりうるとしていた。（PLUCHE, *Le Spectacle de la nature*, nouvelle éd., tome 6, Freres Estienne, 1755, p. 87参照。）

（54）GUIZOT, *Op. cit.*, tome 2, pp. 53-54参照。

（55）*Ibid.*, pp. 54-55 参照。Mme d'Attilly は «La pédanterie est une des variétés de l'amour- propre»（*Ibid.*, p. 54.）としているが、他方で、「自分の義務に熱心で、世帯の世話と子供の教育に専心している女性は、衒学者にならないだろう」（*Ibid.* 参照。）と言っている。

（56）*Ibid.*, p. 56.

（57）*Ibid.*, p. 58参照。

（58）*Ibid.*, pp. 59-60参照。

（59）*Ibid.*, pp. 66-67参照。

（60）*Ibid.*, p. 68参照。

（61）*Ibid.*, p. 32, pp. 33-34参照。Mme d'Attilly は、«En apprenant à porter notre pensée hors de nous, à exercer notre jugement sur des objets étrangers, nous acquérons la faculté et contractons l'habitude de considérer les objets en eux-mêmes, et non par rapport à nous»（*Ibid.* p. 33.）としている。思考対象の広がりと客観的な思考の重視は啓蒙の時代精神の継承である。尚、これらはEmmelineの母親、Mme Mallard宛て書簡で語られたことである。

（62）*Ibid.*, p. 33.

（63）*Ibid.*, p. 34参照。

（64）*Ibid.*, pp. 33-34参照。

（65）*Ibid.*, p. 37参照。この他、Mme d'Attilly は、«Les femmes sont éminemment propres à cette science de charité» であるとして、慈善に関する書物を読むことを推奨している。生来の適性に加え、慈善に関する「いくらかの理論的知識」と「熟慮」を糧に、女性の慈善活動についての意識が高められると考えたのであった。（*Ibid.*, pp. 39-40参照。）

（66）*Ibid.*, p. 40参照。

（67）*Ibid.*, pp. 36-37参照。

（68）*Ibid.*, p. 21参照。

（69）Mme d'Attillyは、Emmelineの母親に対して、«[...] je me hâte de vous engager à conserver auprès de vous mademoiselle votre fille. Je ne connais aucun lieu où elle pût être aussi bien, et me crois assurée qu'aucun des avantages de l'éducation qu'elle pourrait trouver ailleurs ne suppléerait ceux qu'elle perdrait en s'éloignant de vous»（*Ibid.*, p. 19.）と、母親の許での教育が最も好ましいという考えを示している。この問題については、本稿の註（50）参照。